巻頭言

大学移転余聞

足立　孝*

吹田移転を始めてから約15年，第1次移転部局の周辺は，さすがに緑も濃くなり，落着いた雰囲気を醸成している．新設の学部，研究所，研究施設なども加わった建築群が，大阪大学の発展充実ぶりを具現している．

新しいキャンパスを求めて移転することについては，いろんな理由からの反対意見が少くなかった．それにもかかわらず，本学の将来を見越されて，終始一貫，移転推進に努力された赤堀，岡田両学長の御卓見に，今更のように，感銘している．何事も人，時を得なければ成就しないと云われるが，地元にもその人を得たし，時にも恵まれていた．大阪近傍で広い土地を，しかも安く取得しうる最後の機会であったと思うからである．

オイルショックで頭を打ってから，大都市の都心空洞化が指摘され，インナーシティ問題としてその改善策が議論されてきているがそれに関連して，‘大学を追い出したのは失敗であった’という意見もときどきだが聞く．

中世からの大学都市を引き合いに出すまでもなく，戦前の吉田・本郷・早稲田界隈のイメージが懐しく想い出され，大学のある街の雰囲気や大学人・学生・市民の交流が失われたと感じられるのだろう．

しかし，現在は何かにつけて戦前の様子とは違ってきている．大阪の都市軸にしても，堺から千里まで延びており，交通も便利になっているだけに，行政区域や物理的距離だけで速断することはどうかなと思う．それに人文・社会系ならまだしも理工系の新しい研究には，都心周辺では支障を来すものが少くない．

実は，もともと大阪では学生の影が薄かったので，移転の際，北千里駅近くに学生の溜る場所が，いわゆる落第横丁も含めて，できないだろうかと要路の人に相談したり，自ら調査もしてみた．この地区特有のマイナス条件がいくつかあったが，一口に云えば，交通が便利なので，大阪のターミナルで消費するのが多く，地元では少いという結果が出た．

また，最近は府や市が音頭をとり阪大も協力するバイオテクニカル関係の研究機関設立や市の留学生交流会館設立などの企画が進められていて，大学との関係はむしろ深まりつあると感じる．

吹田の土地取得に御尽力をいただいた当時の市長や朝日麦酒社長から‘移転が落着いたら大学の先生方と我々市民との交流の場をつくりましょう’とのお話をいただいていたが市長も交代され，社長も亡くなられて進展しなかった．中之島で続けられている本学の市民開放講座も，いづれ新しい場所を求めねばならなくなるだろう．大阪市大が大阪駅前再開発ビルのワンフロアを購入して活用されつつあるが，便利で集り易い場所だけに賢明な策の一つだと思う．本学も都心の便利なところに交流のための拠点を確保する必要があると思う．そして，当振興協会はもちろん，いろんな会合に，多くの人達に利用してもらえば，‘大学を追い出したのは失敗だった’という意見が杞憂であったことを認識してもらえるだろう．

*足立孝（Adachi TAKASHI），大阪大学，名誉教授，工学博士，建築計画